

新世紀ミュージアム

人びとが足早に行き交う大都会・東京に、地元の人びととのつながりを大切に活動を続ける資料館がある。消えゆく文化を残したいという人びとの想いから生まれたミュージアムのひとつのあり方を見る。

江戸の暮らしが残る町

台東区立下町風俗資料館は、古き良き下町の文化を後世へ伝えることを目的として、上野・不忍池のほとりに昭和五五年に開館した。現在の台東区は、江戸時代から職人や商人が多く住み暮らしやす下町であった。

東京は江戸から名称を変え首都となった近代以降に幾度も大きな転換期を迎えており、下町のすがたや人びとの暮らしも、そのたびに変容をとげてきた。なかでも大正二年の関東大震災と昭和二〇年の戦災は、庶民の生命と財産に壊滅的な被害を与え、その後の暮らしを大きく変えた。

戦後の転換期は昭和三〇年代の高度成長期である。東京ではオリンピック開催を契機とする急速な都市開発が進み、それまでの運河を船が行き交い路面を電車がゆつくりと走る近代都市から、縦横にうねる首都高速道路を自動車が行き交うことな疾走する現代的なメトロポリスへと大きく衣替えを果たした。また、洗濯機、冷

のスタッフは、毎朝、展示場内の路地へへの打ち水や暦の日めくり、神棚へのお供えを欠かさずにおこなっている。家や町を常に手入れし暮らしやすいよう保つことで、実際の生活感や居心地の良さを味わえるよう配慮しているのである。見えないところにも手がかけられており、たんすのなかには季節に合わせた着物がきちんと収納されている。じかに手でさわって確認してみてもいい。

二階では地域にまつわるさまざまな資料を展示している。玩具のコーナーには遊び道具が展示されており、手にとって遊ぶことができる場所も用意されている。すころくやけん玉など、当時のなつかしい遊びを家族や地域の年配の方と一緒に楽しむことができる。暮らしの資料コーナー



上：駄菓子屋の屋内。たんすのなかには季節の着物が収納されている
下：昭和30年代の居間。庶民の暮らしに白黒テレビや黒電話が入ってきた
(写真提供：台東区立下町風俗資料館)

その横には高度成長期のアパートの一室が再現されている。長屋の時代から続くちゃぶ台を中心とした空間に、最新のテレビや電気炊飯器が鎮座する様は、今のわたしたちの生活スタイルの原型であり、江戸と現代とをつなぐ貴

蔵庫、白黒テレビなどの家電が「三種の神器」としてもはやされ、家事や娯楽のありようが一変したのもこの時期である。このような大きな変化のなかで、上野・浅草の下町の暮らしにおいてもむかしながらの風習や日常の景色が少しずつ失われていった。昭和四〇年代に入り、そのことに危機感をもった区民の声をもとに構想が立てられ、台東区内外から多数の資料



銭湯「金魚湯」。番台にのぼり、記念に写真撮影をする来館者も多い
(写真提供：台東区立下町風俗資料館)

では、明治から大正期、昭和初期、戦後、高度成長期といったそれぞれの時代での地域の暮らしや年中行事などが、当時の写真や印刷物、日用品などの所蔵資料とともに紹介されている。

なかでも目をひく展示は銭湯「金魚湯」の番台であろう。台東区蔵前で昭和六一年まで営業していた風呂屋の入口まわりを移築した再現展示である。柱や扉のつやや無数の傷は年季を感じさせるが、紺の暖簾と脱衣かご、脇に置かれた体重計がまるで今も営業しているような雰囲気を出している。実際に番台に上がることができるということもあって、資料館でもっとも人気のあるコーナーのひとつである。

の寄贈を受けて設立されたのが下町風俗資料館である。

文化の継承は「手」が担う

台東区に暮らしやす人びとの切実な想いを受けて設立された下町風俗資料館であるが、その展示は創意と楽しさにあふれている。大きな特徴は、展示場にむかしの家屋とその内部を再現し、来館者が実際にそのなかでの暮らしを体験できるように工夫していることであろう。

関東大震災以前の町には、江戸時代から続く町並みや商売がそのまま残っていたのである。その様子を今のわたしたちに伝えるため、一階には当時の商家と長屋が丁寧に再現されている。しかも外から展示を眺めるだけではなく、入り口や縁側から家のなかに入り、たんすや食器などの家財道具に直接ふれることもできる。駄菓子屋に上がり、ちゃぶ台でお菓子とお茶をいただく気分を味わうなど、思いの体験ができるよう工夫されている。

なお調度品の多くは当時の人びとが使用していた実物であり、資料館の貴重な所蔵資料である。それを惜しげもなく誰もが手にとることができる「ハンズオン展示」を実施しているところに、下町の暮らしをわかりやすく伝えたいという熱意が感じられる。さらに驚くことに、資料館

重な瞬間でもある。そのためなのかどうか、現代人にとっても不思議と落ち着く空間であるらしく、親子やカップルが次々に室内に上がっては、のんびりとくつろぐ姿が印象的であった。

文化継承の拠点としてのミュージアム

下町風俗資料館では、その他に月一回の紙芝居や伝統工芸の実演会、お正月の獅子舞や大黒舞などの季節の実演会なども開催し、また、小学生を対象とした工作教室として「こども土曜塾」などのワークショップも積極的に実施している。台東区の人びとに愛される資料館として地域に密着し、多くの支援者とともに庶民の歴史である下町の記憶を今に伝えている。さらに近年は海外から訪れる方も増えており、下町の文化を国内のみならず広く国外へと紹介する役割も果たしている。

開館から三八年を迎えて、施設や資料の維持管理のうえで課題は多いとのことであるが、地域文化継承の拠点としての先駆けであり、今、各地で求められているミュージアムの好事例であることは間違いない。大切な記憶を次の世代に伝えるその活動は、たんなる懐古趣味とは一線を画する。江戸の下町から世界へと広がる、手ざわり感あふれる情報発信の取り組みに今後も注目である。